

## 『教行信証』における還相回向について

中山 彰 信

## はじめに

最近、『浄土とは何か』（長谷正當著）の著書を読ませていただき、その中に『教行信証』と「回向」の問題を考察されている。その論考のまとめとして、

先に見たように、浄土莊嚴が「国土莊嚴」、「菩薩莊嚴」、「仏莊嚴」の三種に分けられ、それによって如来のはたらきが衆生の歴史的世界の種々の領域に、多様な形をとって現れ、映っていることが示されるならば、還相回向は「菩薩」の上だけではなく、「国土」や「仏」についてもいわれるのでなければならぬ。還相回向が浄土莊嚴として見られるとき、それは最も包括的な視野から捉えられることになる。……（中略）……「大体この往相・還相の問題といふものは、今日では新しい観点となつてゐるのでありますが、親鸞によつて暗示されている往相・還相、特に還相に関しては（中略）それはやはり俗諦の世界であらうと思はれます。（中略）仏教から見ると、この世界のあらゆる文化を挙げて俗諦であつて、それが利他教化地といふ意味で、やはり還相といふ世界が自分にひらめいてくる」（『選集』第十一巻）……（中略）……先に述べたように、親鸞は『教行信証』の「証卷」において「還相回向」を取り上げたとき、もっぱら曇鸞の『論註』の「浄土の莊嚴」の言葉を引用していた。親鸞は、如来のはたらきの「還相」を見たのである。

無限な如来のはたらきが人間の有限な歴史的世界に出現して、そこに映つているところに還相回向があり、それを通して、人間が有限な世界を脱して、無限へと眼差しを向けしめられるところに往相回向がある。還相回向が如来の世界から人間の世界へと向かい来る方向をあらわすなら、往相回向は人間の世界から如来の世界へと向かい行く方向をあらわすのである。それは海流のうねりが深海から人間の世界に向かって打ち寄せ、岸辺を潤したのち、再び深海の底に帰りゆくことに似ている。そのかぎり、人間は海流に翻弄されている不安定な存在にすぎないもののようなのであるが、人間の歴史的生がそのような仕方では如来の掌中であつて営まれていことに、親鸞は正定聚としての有り様を捉え、その生きざまを難思議往生と名づけたのである。

と述べられ、親鸞の還相回向について述べられている。このことは、還相回向は如来のはたらきが衆生の世界に出現するものであり、「海流のうねり」とは往相・還相が循環性を持つとして考えられている。このことは他者阿弥陀如来の還相回向の実体のはたらきが主体的なはたらきとして考えられているものと窺える。

還相回向の捉え方については色々な解釈がされている。

（一）還相回向の主体が他者としての理解される立場

① 曾我量深著『大無量寿経聴記』 一九五三年

われわれは普通に信の一念を起点として、信前・信後を分別するならば、いわゆる信以後の存続を以て往相とし信開発以前を還相と理解すべきであろう。……われわれは家庭や社会の有縁の人々を始として、天地万物の上に順にも逆にも不可思議なる還相廻向の事実に対面するのである。この還相廻向に対面せしむることによって、自信の往相を成就し証明せらるるのである。還相廻向は単なる果後の来生の要請に止まるものではない。過去・現在における限りなき還相の養育に対する自身の反逆が来生の還相の裏付けである。

・阿弥陀如来のはたらきが信前の還相のはたらきとして考えられる。

② 田辺元著「親鸞の三願転入説と懺悔道の絶対還相観」『懺悔道としての哲学』一九六三年

如来大悲の願が法蔵菩薩因位の修業に媒介せられるとする浄土教の思想そのものが、すでに全体として如来回向の還相性を根底とするのであって、如来に於ける自己内還相即往相ともいべき循環性が、衆生の救済に於ける往相即還相というべき事態を成立せしめると考えなければならぬことも否定できない。

・往相廻向還相廻向が如来のはたらきと捉えてある。

③ 寺川俊昭著「親鸞の二種回向論」『宗教研究』二八三 一九八九年

還相回向とは、真実信心をおこして仏道に立つ者にまで衆生を教化し育む、より深い如来の恩徳である。それは決して往相道を全うした「我」が、再び流転の現実へ還って他の衆生を救うことではない。流転の中に苦悩する救いなき我に還相して、仏道を求める者にまで我を教化し、信心をおこして如来の功徳を受ける者にまで我を育む如来の恩徳である。と、親鸞は語るのである。そしてこの還相回向の具体相を、「智慧光のちからより」応化して真実教を語って止まぬ師法然に、さらに根本教主釈尊に、親鸞は明確に自証していたに違いないのである。

・如来の恩徳まで還相回向と考えられるのか。

（二） 還相回向の実体が自己としての理解される立場

① 久松真一著「究極の仏教的生活としての還相行」『大谷学報』二九・二 一九四九年

仏教の究極の在り方は、つまり、私の生活にならなければならぬ……もし、仏教を現実において、また将来にしましても、本当の宗教として立ててゆくには、還相的生活を現成するということに向かつて進まなければならないと思う。

・現生正定聚によつて即身成仏的に自己が還相回向のはたらきを行うことができると考えてある。

② 金子大栄著『教行信証の研究』 岩波書店 一九五六年

還相の生活は普賢行といはれてゐる。…我等はその境地を想像することすらもできない。けれど顧みて、これを思へば、それは畢竟、如来の悲願を念じつゝ人間生活を為すことの外ないのではなからうか。高く大いなる心を以て見れば、いかに卑賤と思はるゝ業も、惣べて世の爲となり人の爲になつておるのである。

・還相回向を自己の現象と見ておられる。

③ 野間宏著『親鸞』 岩波書店 一九七三年

弥陀の誓願の正しいことを信じて、念仏する心の起こったとき、すでに仏となると定まった、仏とひとしい位である正定聚の位につくと言われているからには、その瞬間すでに浄土に言っているわけであり、浄土に行きついたならばすでに仏であるが故に、自利の、みずからのために念仏して浄土に行くという心はすでになく、他の多くの人を浄土に行きつかせたいものだという、他のすべての人の往生のたを願う利他の心をそなえてこの世にすぐに引き返してこなければならぬということになる。この考えこそ、親鸞が『教行信証』のなかで深めることのできた自利利他の考えを正確に取りだしているのである。

・自己が正定聚において還相摂化すると考えられている。

④ 岡亮二著「親鸞思想に見る「往相と還相」(下)」『龍谷大学論集』四四六 一九九五年

往相の行者である七高僧のすべてが、まさに親鸞その人においては、還相の菩薩として領解されていたのであり……さらに言えば、もし父や母が浄土にましますのであれば、『歎異抄』の「神通方便をもて、まず有縁を度すべきなり」の言葉よりして、なによりもまず、私の往生を願って、私と共に礼拝し讃嘆し作願し観察したもうている、父母の還相の姿を、私たちはこの中に見出すことになるのである。

・衆生(往生人)が還相の菩薩と考えてある。

このような還相回向の理解について、主体が他者または自己と考える方が色々ある。今回は親鸞の、還相回向の主體的立場として如何なる理解をもっていたのであるかを考察するものである。

一

そこで、親鸞は「教巻」の冒頭に

謹按浄土真宗有二種廻向。一者往相、二者還相。就往相廻向、有眞實教行信證 (真宗聖教全書Ⅱ・2)

つつしんで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について眞實の教行信証あり。

と、二種の回向を示され、往相とは此土より浄土に往生して仏果を証することを、還相とは浄土において仏果を証した後、娑婆世界へ帰り衆生済度する摂化活動を示される。その回向について「正像末

和讃」に

南无阿彌陀佛の廻向の  
恩徳廣大不思議にて  
往相廻向の利益には  
還相廻向に廻入せり

(真宗聖教全書Ⅱ・522)

と、往相還相の徳の成就されている名号を如来は衆生に回向されるのであり、この名号が衆生に受容されて往相還相と展開するものである。

又、「行巻」の「大行釈」に

爾者、乘大悲願船、浄光明廣海、至徳風靜、衆禍波轉。即破无明闇、速到无量光明土、證大般涅槃、遵普賢之徳也。可知。

(真宗聖教全書Ⅱ・35)

しかれば大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風靜かに、衆禍の波転ず。すなはち無明の闇を破し、すみやかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す。普賢の徳に遵ふなり、知るべしと。

と、如来の大悲心のことわりが示され、その大悲心の往相回向のはたらきによって浄土に生まれ悟れたあと「普賢の徳」によって還相回向し、衆生済度する徳であることを明かされている。そのことについて親鸞は『浄土文類聚鈔』に

然本願力廻向、有二種相。一者往相、二者還相。就往相有大行亦有淨信。大行者、則稱无碍光如来名。斯行偏攝一切行極速圓滿、故名大行。 (真宗聖教全書Ⅱ・443)  
しかるに本願力の回向の二種の相あり。一つには往相、二つには還相なり。往相について大行あり。また淨信あり。

大行といふは、すなはち無碍光如來の名を称するなり。この行はあまねく一切の行を摂し、極速円満す。ゆゑに大行と名づく。

と示され、本願力回向によつて往相還相の二回向があることを明かされる。さらに往相の大行が念仏であることを明かされる。「正像末和讃」に

往相廻向の大慈より  
還相廻向の大悲をう

如來の廻向なかりせば

浄土の菩提はいかゞせん

（真宗聖教全書Ⅱ・522）

と、阿弥陀如來の本願力によつて往相還相の二回向の大慈悲によつて、浄土の菩提の境地に至り、大慈悲を回向していくことを示されている。往還二回向の本願他力による廻向法としてあきらかに示される。また往相回向について教巻の冒頭に「往相回向について真実の教・行・信・証あり」と示され、教巻・行巻・信巻・証巻の四法結集まで往相回向が示される。如來の大慈悲の回向が清浄願心の廻向成就によるもので、全てが清浄な真実なはたらきのものであることを示されている。

そこで、還相回向とは『浄土論註』下 起觀生信章に

還相者、生彼土已、得奢摩他毘婆舍那方便力成就、迴入生死稠林、教化一切衆生、共向佛道。若往若還、皆爲拔衆生渡生死海。是故言「迴向爲首得成就大悲心故」。

（真宗聖教全書Ⅰ・316）

還相とは、かの土に生じをはりて、奢摩他・毘婆舍那を得、方便力成就すれば、生死の稠林に廻入して一切衆生を教化して、ともに仏道に向かふなり。もしは往、もしは還、み

な衆生を抜きて生死海を渡せんがためなり。このゆゑに回向を首とし大悲心を成就することを得んとするがゆゑなりといへり。

と、浄土に往生し、止觀方便力成就ののち一切の衆生を教化し、仏道に入らしめるはたらきでありその回向のはたらきが如來の大悲心の回向である。それは菩薩道の利他行というべきものである。しかるに親鸞は他力回向の立場より「証巻」において独自の立場より解釈されている。

「証巻」の冒頭に、真実の証果について

謹顯眞實證者、則是利他圓滿之妙位、无上涅槃之極果也。

（真宗聖教全書Ⅱ・103）

つつしんで真実の証を顕さば、すなはちこれ利他円満の妙位、無上涅槃の極果なり。

と、真実の証果を利他円満之妙位、無上涅槃之極果と示し、二利円満の如來の果であることを明かしている。この証果・滅度の徳相を常樂・畢竟寂滅・無上涅槃・無為法身・実相・法性・真如・一如と示し、仏果の内容をあきらかにされる。これをうけて

然者彌陀如來從如來生、示現報・應・化種種身也。

（真宗聖教全書Ⅱ・103）

しかれば弥陀如來は如より來生して、報・應・化、種々の身を示し現じたまふなり。

と、阿弥陀如來が滅度の証果である一如の法性法身より垂名示形し、方便法身としてあらわれ、報身土さらに応身・化身として現われたことを示される。同様の趣意の文言が「一念多念文意」に



一實眞如とまふすは無上大涅槃なり、涅槃すなわち法性なり、法性すなわち如來なり、宝海とまふすは、よろづの衆生をきらはずさわりなく、へだてず、みちびきたまふを、大海のみづのへだてなきにたとへたまへるなり。この一如宝海よりかたちをあらわして法藏菩薩となりのりたまひて、无碍のちかひをおこしたまふをたねとして、阿彌陀佛となりたまふがゆへに報身如來とまふすなり  
(真宗聖教全書Ⅱ・616)

又、「唯信鈔文意」にも、

しかれば佛について二種の法身まします、ひとつには法性法身とまうす、ふたつには方便法身とまうす。法性法身とまうすは、いろもなし、かたちもまします。しかればこゝろもおよぼす、ことばもたえたり。この一如よりかたちをあらはして方便法身とまうす、その御すがたに法藏比丘となりのりたまひて不可思議の四十八の大誓願をおこしあらはしたまふなり。この誓願のなかに光明无量の本願壽命无量の弘誓を本としてあらはれたまへる御かたちを、世親菩薩は盡十方无碍光如來となづけたてまつりたまへり。この如來すなはち誓願の業因にむくひたまひて報身如來とまうすなり、すなはち阿彌陀如來とまうすなり。

(真宗聖教全書Ⅱ・630)

と、阿彌陀仏が来生した根源の一如の証果が、浄土の往生人の得る涅槃であることを示している。このことは、一如より阿彌陀如來が来生したことは、浄土往生人の証果を説示され、又浄土に生まれることによって、還相摂化に出る徳にめぐまれることが示され、娑婆世界に還来することを示されていると言えよう。

## 二

「証卷」の四法結釈が述べられた後、還相回向について

言還相回向者、則是利他教化地益也。則是出於必至補処之願、亦名一生補処之願亦可名還相回向之願也。願『註論』、故不出願文、可披『論註』。  
(真宗聖教全書Ⅱ・106)

二つに還相の回向といふは、すなはちこれ利他教化地の益なり。すなはちこれ必至補処の願(第二十二願)より出でたり。また一生補処の願と名づく。また還相回向の願と名づくべきなり。『註論』(論註)に顯れたり。ゆゑに願文を出さず。『論の註』を披くべし。

と示され、還相回向は利他教化地の益として衆生救済のはたらきを具えたものであることを示す。「浄土文類聚鈔」には

大涅槃即是利他教化地果  
(真宗聖教全書Ⅱ・446)

大涅槃、即ちこれ利他教化地の果

と述べられ、滅度の証果は自利利他円満の世界で利他教化地の果としてたらくものであることをあかしている。

利他教化地の果として還相回向が成立する根源は第二十二願に示される。その願を必至補処之願・一生補処之願・還相回向之願と述べたあとに「『論註』に顯われたり、故に願文いわず、『論の註』を披くべし」と、第二十二願文を出さず、『浄土論註』をひらくことが述べられる。その後、『浄土論』の出第五門を示され、

『浄土論』曰「出第五門者、以大慈悲觀察一切苦惱衆生、示應化身回入生死、煩惱林中、遊戲神通至教化地。以本願力

回向故、是名出第五門」

（真宗聖教全書Ⅱ・107）

『浄土論』には、「出第五門とは、大慈悲をもつて一切苦悩の衆生を觀察して、応化の身を示す。生死の園、煩惱の林のなかに回入して、神通に遊戲して教化地に至る。本願力の回向をもつてのゆゑに。これを出第五門と名づく」と。

『浄土論』の文を示される。この文の意は大悲願心をもつて苦悩の衆生の中へ入るといふことは、從因向果の願生浄土の菩薩のはたらきを示すものと考えられる。しかし、その後に「本願力回向をもつての故に」と。從因向果の菩薩の願力であるが親鸞は利他教化の還相回向のはたらきであると考えられ、阿弥陀如来の本願力回向により還相回向がめぐまれると考える。その後に『浄土論註』の起觀生信章の還相回向の文が引かれる。

『論註』曰。「還相者生彼土已、得奢摩他毘婆舍那方便力成就、回入生死稠林、教化一切衆生、共向佛道。若往若還、皆為拔衆生渡生死海。是故、言回向為首得成就大悲心故。」

（真宗聖教全書Ⅱ・107）

『論註』（下）には、「還相とは、かの土に生じをはりて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就することを得て、生死の稠林に回入して、一切衆生を教化して、ともに仏道に向かへしむるなり。もしは往、もしは還、みな衆生を抜いて生死海を度せんがためなり。このゆゑに、回向を首として大悲心を成就することを得たまへるがゆゑにとのたまへり」と。

「かの土に生じをはりて、奢摩他・毘婆舍那・方便力成就する」ということは、行者が止・觀の行を修し利他行を成就し、菩薩となつて還相の摂化活動を行う。そして「回向を首として大悲心を成就す

ること。」と、『浄土論』に示されていることから如来の大悲心の還相摂化のはたらきによって成就されるものであると親鸞は解釈されたと考える。そのはたらきをなすものが、第五果門の園林遊化地門であると解釈されていたと考える。

以後、還相回向の内容を示すために親鸞は『浄土論註』の下巻を引用されている。觀察体相章の不虛住持功德の文を引文より、未証淨心の菩薩が阿弥陀如来を願い見るときに平等法身を得証することを示される。その中に『大無量壽經』の第二十二願を引文される。

設我得佛他方佛土諸菩薩衆、來生我國究竟必至一生補處。除其本願自在所化、為衆生故、被弘誓鎧、積累德本、度脫一切、遊諸佛國修菩薩行、供養十方諸佛如来、開化恒砂無量衆生、使立无上正眞之道。超出常倫、諸地之行現前、修習普賢之德。若不爾者、不取正覺。

（真宗聖教全書Ⅱ・108）

たとひわれ仏を得たらんに、他方仏土のもろもろの菩薩衆、わが国に來生して究竟じてかならず一生補處に至らん。その本願の自在の所化、衆生のためのゆゑに、弘誓の鎧を被て徳本を積累し、一切を度脱せしめ、諸仏の国に遊びて、菩薩の行を修し、十方の諸仏如来を供養し、恒沙無量の衆生を開化して無上正眞の道を立せしめんをば除く。常倫に超出し、諸地の行現前し、普賢の徳を修習せん。もししからずは正覺を取らじ、と。

と示し、『大經』第二十二願は阿弥陀如来の本願力で平等法身の菩薩となつた仏が衆生を濟度していく。從果降因の還相の菩薩の摂化活動の成立する根拠が第二十二願にあることを示される。この第二十二願は還相の菩薩の大慈悲のはたらきを誓われたものである。故に、親鸞は『浄土文類聚鈔』に

願成就文『經』言。「彼国菩薩、皆當究竟一生補處。除其本願

為衆生故、以弘誓功德、而自莊嚴、普欲度脱一切衆生。

(真宗聖教全書Ⅱ・446)

願成就の文、『經』にのたまはく、「かの國の菩薩、一生補処を究竟すべし。その本願、衆生のためのゆえに、弘誓の功德をもつてみづから莊嚴し、あまねく一切衆生を度脱せんと欲せんをば除く」と。

と示し、浄土の國の菩薩は如來の本願が衆生の摂化の為のゆえに、その本願の功德をもつて一切の衆生の解脱させることを欲する。(ここに浄土に生まれた菩薩であることを示している。) また、「浄土和讃」には

安樂無量の大菩薩

一生補処にいたるなり

普賢の徳に帰してこそ

穢國にかならず化するなれ

(真宗聖教全書Ⅱ・488)

と、浄土往生の行者菩薩が「一生補処の位」に住し、「普賢の徳」(浄土に往生した菩薩の相をとつて再びこの世へ還り、衆生を済度する徳)のはたらきによることを示される。

親鸞は『大無量寿經』の第二十二願を根拠として『浄土論』『浄土論註』の意を考えられていることに注意される。そのことは「超出常倫諸地之行現前」を通常は「常倫諸地の行に超出し、現前に」と読む所を「常倫に超出し、諸地の行現前し」と、十地の階地を超越してという意に解される。「諸地之行現前」とは還相示現の徳を示す。還相回向は浄土の従果降因の還相の菩薩のはたらきの行であること。故に、阿弥陀如來を願生する者が浄土に生まれ、奢摩他・毘婆舍那の止觀行を浄土で満足し、平等法身と超証した菩薩として利他善巧方便の力を成就し、還相摂化のはたらきであることを明かされる。

その後、三嚴二十九種の莊嚴の中、仏の八種莊嚴を示し、阿弥陀如來の自利利他の功德が成就していることを明かし、

既知國土相、應知國土之主、是故次觀佛莊嚴功德。彼佛若為莊嚴、於何處座、是故先觀座。既知座已、宜知座主、是故次觀佛莊嚴身業。(真宗聖教全書Ⅱ・109)

すでに國土の相を知んぬ、國土の主を知るべし。このゆゑに次に仏莊嚴功德を觀ず。かの仏もし莊嚴をなして、いづれの処にしてか座すると。このゆゑにまづ座を觀ずべし。すでに座を知んぬ、すでによりしく座主を知るべし。このゆゑに次に仏の身業を莊嚴したまへるを觀ず。

國土莊嚴功德の中で浄土が建立され、その座主が阿弥陀如來であり、今すでに如來が浄土の主としておられることが示される。このことは浄土が阿弥陀如來の建立されたもので、浄土の根源が阿弥陀如來であることを明かす。阿弥陀如來が座主ということは還相の菩薩となつて直接に摂化活動をされるということではなく、如來の本願によつて浄土に生まれた諸菩薩が浄土において還相の菩薩となつて次の還相摂化のはたらきをされることを意味している。故に、親鸞は還相の菩薩の四種の正修行功德成就の内容をしめされた菩薩の文をあげられている。

眞如是諸法正体。体如而行則是不行。不行而行、名如實修行。体唯一如而義分為四。是故四行以一正統之。

(真宗聖教全書Ⅱ・110)

眞如はこれ諸法の正体なり。体、如にして行ずればすなはちこれ不行なり。不行にして行ずるを如實修行と名づく。体はただ一如にして義をして分ちて四つとす。このゆゑに四行、一をもつてまさしくこれを統ぬ。

と、真如の体は「如」であり、菩薩はとらわれをはなれた真如の行を行ずることであり、その義は四つに示される。この四種正修行功德 (1)不動而至の徳 (2)一念遍至の徳 (3)無相供養の徳 (4)示法如仏の徳と還相のはたらきの具体的内容を示される。

浄土から出た菩薩も、本當の仏・如来になる為の徳が還相回向によって示されていくことを明かされる。このことは、本願力による往相回向によって衆生が往生し、往生したあとは還相の菩薩となつて如来の徳のはたらきによって摂化活動・利他教化地の益をおさめることを示すと考えられる。循環的な往相還相のはたらきの意味するものではないようだ。あくまでも、往相の本願力回向によって還相の菩薩となった摂化活動（自利利他の如来のはたらきとなるものである。）それ故に、親鸞は『浄土論註』の浄入願心章によって

此三種莊嚴成就由本四十八願等清淨願心之所莊嚴、因淨故果淨、非无因他因有也。 （真宗聖教全書Ⅱ・111）

この三種の莊嚴成就は、もと四十八願等の清淨の願心の莊嚴せるところなるによりて、因淨なるがゆゑに果淨なり。因なくして他の因のあるにはあらずと知るべしとなり。

と、三嚴二十九種の莊嚴は、阿弥陀如来の清淨願心の莊嚴である。故に、三種莊嚴は「浄」であり、その体も無漏清淨である。浄土は阿弥陀如来の清淨願心により、莊嚴成就された世界で仏の願心が酬報した世界である。それ故に、未証淨心の菩薩も浄土に生まれ如来を見れば、浄土の徳により清淨になり平等法身を得、還相の大悲のはたらきにめぐまれるものであることを示される。この三種莊嚴に浄土の還相摂化成立の根拠・根源が示されている。又、浄入願心章には浄土の本質の説明として広略相入・二種法身・一法句の義が説かれている。それは三嚴二十九種を「広」となし、入一法句を「略」となす。このあとに

何故示現廣略相入、諸佛菩薩有二種法身。一者法性法身、二者方便法身。由法性法身生方便法身、由方便法身出法性法身。此二法身、異而不可分、一而不可同。是故廣略相入、統以法名。菩薩若不知廣略相入、則不能自利利他。

（真宗聖教全書Ⅱ・111）  
なにがゆゑぞ広略相入を示現するとならば、諸仏菩薩に二種の法身あり。一つには法性法身、二つには方便法身なり。法性法身によりて方便法身を生ず。方便法身によりて法性法身を出す。この二の法身は異にして分つべからず。一にして同じかるべからず。このゆゑに広略相入して、統ぬるに法の名をもつてす。菩薩、もし広略相入を知らざれば、すなはち自利利他するにあたはず。

と三嚴二十九種が阿弥陀如来の願心により成就されたもので、全性修起して浄土を建立されたものである。浄土は真如の展開であり本質である。又三嚴二十九種も一法句の真如を根底として成立しているもので、仏身仏土の莊嚴相である。この広略相入を具体的に示すものが二種法身の積である。法性法身は真如の理であり、法身は真如の理体が全顯した身である。方便法身は形なきものを形をあらわした善巧の義の身である。故に、曇鸞は由性由出、不一不異の義で示される。それは法性法身は「略」で方便法身は「広」と生起し、法性法身の略の徳が、方便法身となつて、三嚴二十九種の徳としてあらわれたものである。さらに「菩薩、もし広略相入を知らざれば、すなわち自利利他するにあたはず」とここに一つ気になる点を覚える。それは菩薩が浄土の本質・根源を知っておくことが前提にあるのではないだろうか。このことは浄土がどのようにに成立したのかの本質であり、法藏菩薩の本願を立てられたいわれにある。その本願の願いが成就していることを意味していると考えられる。

无為法身者法性身也。法性寂滅故、法身无相也。无相故能无



不相、是故相好莊嚴則法身也。(真宗聖教全書Ⅱ・112)

無為法身は法性身なり。法性寂滅なるがゆゑに法身は無相なり。無相のゆゑによく相ならざることなし。このゆゑに相好莊嚴すなはち法身なり。

と、無為法身は法性法身であり、その法身は法性寂滅の法身故に、無色無形無相の如來である。無相ということは如何なる相も、とり入れる可能性を有する。法性法身の無相より方便法身の相好莊嚴が生ずるものであることを示し、広略相入の義を説明している。そのことは広略相入を説明される所で「菩薩、もし広略相入を知らざれば、すなわち自利利他するにあたはず。」と、菩薩は「略」である真如を体得することによって自利を満足せしめ、「広」である三嚴二十九種の莊嚴を知ることにより、衆生摂化の利他を満足せしめるのである。若し「広」を知らなければ、俗諦の染淨差別を了知できず、利他することができない。又、「略」を知らなければ真諦の平等不二を了知することができないから、自利することはできない。淨土は自利利他円満の涅槃界であることを示すものである。一法句・広略相入・二種法身の説示は仏身仏土の成立する根源的原理をあきらかにするものである。故に、淨土の根源的原理を明らかに示されていることは、淨土の徳と還相摂化の大慈悲のはたらきが顕現されていることを明かすものである。さらに「諸仏菩薩に二種の法身あり」と述べられるように、淨土に生まれた往生人の得る証果の内容は弥陀同体の自利利他円満の証果がめぐまれている。これが願心莊嚴の淨土の徳であることをあかす。法蔵菩薩の本願により莊嚴された淨土は、衆生済度の方便法身のはたらきがそなわる。又淨土に生まれた往生人はこの淨土において必然的に弥陀同体の二種法身・広略相入の徳をうけることになる。『唯信鈔文意』に

「來」はかへるといふ、かへるといふは願海にいりぬるによりてかならず大涅槃にいたるを法性のみやこへかへるとまう

すなり。法性のみやこといふは、法身とまうす如來のさとりを自然にひらくなり、さとりひらくときを法性のみやこへかへるとまうすなり。これを眞如實相を證すともいふ無為法身ともいふ滅度にいたるともいふ、法性の常樂を證すともいふ、无上覺にいたるともまうすなり。このさとりをうればすなはち大慈大悲きはまりて、生死海にかへりいりてよろづの有情をたすくるを普賢の徳に帰せしむといふなり。この利益におもむくを來といふ (真宗聖教全書Ⅱ・620)

と述べられていることは、淨土へ生まれた往生人が滅度の証果を得ることをあかし、淨土の徳の「普賢の徳」還相摂化の大慈悲のはたらきをもつて穢土へ還來できるものである。このことを『歎異抄』第四章、第五章に

今生に、いかにいとをし不便とおもうとも、存知のごとくたすけがたければ、この慈悲始終なし。しかれば、念仏まふすのみぞ、すえとをりたる大慈悲にてさふらうべき、と。

(真宗聖教全書Ⅱ・775)

わがちからにてはげむ善にてもさふらはばこそ、念仏を廻向して、父母をたすけさふらはめ。ただ自力をすてて、いそぎさとりをひらきなば、六道四生のあひだ、いづれの業苦にしづめりとも、神通方便をもて、まづ有縁を度すべきなり、と。

(真宗聖教全書Ⅱ・776)

と、親鸞は淨土で証果を得て、菩薩・仏となり大慈悲心のはたらきをもつて還相摂化のはたらきをなすことを述べられている。

## 三

次に、『浄土論註』の善巧摂化章を引用される。

善巧摂化者、如是菩薩、奢摩他毘婆舍那、廣略修行成就、柔軟心。柔軟心者、謂廣略止觀、相順修行、成不二心也。

（真宗聖教全書Ⅱ・113）

善巧摂化とは、かくのごときの菩薩は、奢摩他・毘婆舍那、廣略修行成就して柔軟心なり（浄土論）とのたまへり。柔軟心とは、いはく広略の止觀、相順して修行して、不二の心を成ぜるなり。

この善巧摂化とは、仏・菩薩が種々の手段・方法をめぐらして衆生を巧みに摂化することで、善巧とは自利をまつとうする利他をいい、摂化とは一切を化益する教化である。このことは還相のはたらきで広略止觀の修行をし、柔軟化（物事にとらわれない）し成就することにある。

そこで今回の研究の趣旨は「親鸞は還相回向する主体は誰であるか。」ということに論点の中心として考察しているのである。それは他者（仏）・自己（念仏の衆生）という点にある。この善巧摂化章に「如是菩薩」と示され、ここには「奢摩他・毘婆舍那・広略修行成就」と示され、自利利他を成就した菩薩であることが考えられる。

そこで、親鸞が最初に還相回向について論じられている点を見ると、「証卷」の還相回向の内容を示す引用文には「還相とは彼の土に生じをはりて奢摩他・毘婆舍那方便力成就すること」と示される。又善巧摂化章には「かくのごときの菩薩は、奢摩他・毘婆舍那、廣略修行成就して柔軟心なり。」（「証卷」真宗聖教全書Ⅱ・111）と、この意から浄土で成就された還相の菩薩であると考えられる。しかるに、前章の浄入願心章の文に「菩薩もし広略相入を知らざれば、

すなわち自利利他することあたわず。」と示されていることは、この後の善巧摂化の「かくのごとき菩薩」にも関連していると考えられる。浄入願心章の文は還相の菩薩には利他大慈悲の回向がそいであることに意がなされている。この点を受けて「かくのごとき菩薩は奢摩他・毘婆舍那廣略修行成就して柔軟心なり」と親鸞の思いが気づかされる。それは『浄土論註』においては「かくのごとき菩薩、奢摩他・毘婆舍那、広略に修行して、柔軟心を成就す」と、それを親鸞は読みかえられている。この意から還相の菩薩に対し、何か不可思議な回向によって、菩薩に還相回向のはたらきがそなわっていることが考えられる。それは法藏菩薩が本願力回向の修行によって浄土を建設され、衆生が本願力廻向に導かれて浄土往生が決定する願いが前提にあるとが考えられる。そのあと、

此無上菩提心、則是願作仏心、願作仏心則是度衆生心、度衆生心則是攝取衆生有仏国土心、是故願生彼安樂浄土者、要發無上菩提心也。

（真宗聖教全書Ⅱ・114）

この無上菩提心は、すなわちこれ願作仏心なり。願作仏心は、すなわちこれ度衆生心なり。度衆生心は、すなわちこれ衆生を攝取して有仏の国土に生ぜしむる心なり。この故に、この安樂浄土に願ずるものは、かならず無上菩提心を欲するなり。

と、彼の安樂浄土に生ぜんと願ずるものはかならず無上菩提心を発すると。還相の菩薩が願生する往生人の菩薩であることを示し、願作仏心度衆生心と衆生を攝取して有仏の国土に生ぜしむる心の大切なことを示す。そのことについて親鸞は「正像末和讃」に

浄土の大菩提心は  
願作仏心をすすめしむ  
すなわち願作仏心を

度衆生心となづけたり

度衆生心といふことは  
弥陀智願の回向なり  
回向に信樂うるひとは  
大般涅槃をさとりなり

如来の回向に帰入して  
願作仏心をうるひとは  
自力の回向をすてはてて  
利益有情はきはもなし

(真宗聖教全書Ⅱ・518)

とうたわれ、親鸞は往相・還相回向を説かれ、菩薩が衆生の往生人と考えることができる。

これらのことを考えると、「如是菩薩」の菩薩とは浄土へ往生した衆生の菩薩である。しかし、その菩薩に法藏菩薩の修行が、還相の菩薩の根源・本質的摂化活動にはたらくていて、親鸞は考えていた。故に、浄土の菩薩の還相回向であるが、菩薩の止・観修行にも、法藏菩薩の修行成就のはたらきが根源的はたらきとして浄土の地からはたらきづくめであると考えられる。

この内容が「証巻」の善巧摂化章（自利利他円満の還相の菩薩の衆生済度の大悲のはたらき）・障菩提章と順菩提章（還相の菩提の利他行である善巧摂化の菩提心を遠離と随順の両面より顕出）・名義摂化章（還相の大悲のはたらきは不二一体の関係にある般若と方便の両面。般若と方便は大悲のはたらきの本質構造―般若（智恵心）方便心・無障心・如樂勝真心の四心は還相の菩薩の大悲のはたらきの根源心として）・願事成就章までに示されていく。（親鸞は菩薩の摂化活動の内容を考慮し『入出二門偈』に示されたと考える。）故に、還相の菩薩の摂化の内容を四心で示される。

「証巻」の願事成就とは「願」とは四心（四種の心）で、「事」と

は五念門の行で、願行により浄土に生ずることが成就されたことを述べる。そこで、

願事成就者、如是菩薩智慧心・方便心・无障心・勝真心、能生清浄佛国土、應知。應知者謂應知此四種清浄功德、能得生彼清浄佛国土、非是他縁而生也。

(真宗聖教全書Ⅱ・116)

願事成就とは、かくのごとき菩薩は智慧心・方便心・無障心・勝真心をもって、よく清浄仏国土に生ぜしめたまへりと、知るべし（浄土論）とのたまへり。知るべしとは、いはく、この四種の清浄の功德、よくかの清浄仏国土に生ずることを得しむ。これを他縁をして生ずるにはあらずと知るべしとなり。

と、『論註』の読みでは「是の如く菩薩は智慧・方便心・無障心・勝真心をもって能く清浄の仏国土に生ず」と願生行者（菩薩）は四心成就して浄土に生ずる意である。親鸞は「かくの如き菩薩は知恵心・方便心・無障心・勝真心をもってよく清浄仏国土に生ぜしめたまへりと知るべしとのたまへり」と還相菩薩の衆生済度の心のはたらきを、四心をそなえ衆生をして浄土に生まれると。四心による衆生済度の還相菩薩の大悲のはたらきと示される。還相の菩薩はこの清浄功德により衆生を清浄仏国土に生まれさせる。このことは四心が如何に清浄な功德の摂化であるかを示す。

その後、五念門行について還相の菩薩が五念門の自利利他の行が満足されている意がとかれる。それによって、還相の菩薩は往生浄土の証門に随順することによって、自在の業成就が出来ることを示す。

利行満足章（自利利他の行が満足して仏果を証することを明かす。）は、此土における因の五念門が成就し、浄土において果の五果門を得ること示す。

利行満足者、復有五種門、漸次成就五種功德、應知。何者五門。一者近門、二者大會衆門、三者宅門、四者屋門、五者園林遊戲地門。此五種示現入出次第相。

（真宗聖教全書Ⅱ・117）

利行満足とは、また五種の門ありて、漸次に五種の功德を成就したまへりと、知るべし。なにものか五門。一つには近門、二つには大会衆門、三つには宅門、四つには屋門、五つには園林遊戲地門なりとのたまへり。この五種は、入出の次第の相を示現せしむ。

と、親鸞は「五種の功德成就したまへり」を「五種の功德成就したまへり」と読まれている。先の文は浄土往生の従因向果の菩薩が五果門の功德を満足するの意であるが、親鸞は還相の菩薩が阿弥陀如来の本願力により、五果門の功德を満足されたと。又「入出の次第の相を示現する」を「入出の次第の相を示現せしむ」と読まれている。このことは還相の菩薩のはたらきが、すべて本願他力、浄土の徳によるものであることを明かす。

還相の大悲のはたらきを示す第五果門について

出第五門者、以大慈悲觀察一切苦惱衆生、示應化身、回入生死菌煩惱林中、遊戲神通、至教化地。以本願力回向故、是名出第五門

（真宗聖教全書Ⅱ・118）

出第五門とは、大慈悲をもつて一切苦惱の衆生を觀察して、応化身を示して、生死の園、煩惱の林のなかに回入して、神通に遊戲し、教化地に至る。本願力の回向をもつてのゆゑに。これを出第五門と名づく

これは、『浄土論』の還相回向釈を示される冒頭の文と同じである。最後にも同文をもちいられていることは、一切の苦惱する衆生を浄

土の根源より色々な応化身となつて衆生を大慈悲のはたらきで摂化するものが本願力回向であり、阿弥陀如来の本願であることを明かす。それが還相回向であることを示し、第五の園林遊戲地門の意味を示している。それ故に如来の還相回向の利他行のささえがはたらいっていることを親鸞は『入出二門偈』に

菩薩入出五種門 自利利他行成就  
不可思議兆載劫 漸次成就五種門

（真宗聖教全書Ⅱ・481）

菩薩は五種の門に入出して、自利利他の行成就したまへり。不可思議兆載劫に、漸次に五種の門を成就したまへり。

と、五念門について親鸞は法藏菩薩が本願を成就する為に時間をかけられて成就された修行であること、五念門は法藏菩薩の行である。又

不捨苦惱一切衆 廻向為首得成就 大悲心故施功德

（真宗聖教全書Ⅱ・482）

苦惱の一切衆を捨てずして、回向を首として、大悲心を成就することを得たまへるがゆゑに、功德を施したまふ

と 法藏菩薩が大悲心を成就した故に、回向し功德をほどこしている」と法藏の回向が示され、

无碍光佛因地時 發斯弘誓建此願  
菩薩已成智慧心 成方便心无鄣心  
成就妙樂勝眞心 速得成就无上道  
成自利利他功德

（真宗聖教全書Ⅱ・482）

無碍光仏、因地のとき、この弘誓を發し、この願を建てたまふ。菩薩すでに知恵心を成じ、方便心・無障心を成じ、



妙樂勝真心を成就して、すみやかに無上道を成就することを得たまへるなり。自利と利他との功德を成ずる。

#### 参考資料

と 入出二門偈の前後には 五念二利は全て法藏菩薩所修のものであることが示される。浄土の根源より大慈悲心のはたらきとなつて、衆生摂化のはたらきをされているのが、阿弥陀仏の本願のはたらきであることが明かされる。

## 結

「証卷」の還相回向の内容は『浄土論註』の文によつて還相回向の内容を示される。しかるに、還相の主体が他者(阿弥陀如来)か、自己(往生人の菩薩)かと考えると、親鸞は最後の利行満足章の文を解せば、阿弥陀如来の本願力回向と考えられる。しかし、起観生信章の流れの文の中で「如是菩薩」等を示される文と、親鸞の和讃・和語集の文を考えると、還相の菩薩とは往生人(衆生)が浄土往生したあと、浄土から菩薩となつて摂化活動におもむくと考えられる。仏莊嚴・菩薩莊嚴のその意をふくまれていると考える。

又、第五果門の中に「応化身を示して、生死の園、煩惱の林のなかに入して」と示してあることは、阿弥陀如来は仏莊嚴の中にも示されている「浄土の座主」として、十方へはたらきかけられているという。両者を考慮すると、親鸞は師法然を還相の菩薩と、したわれていたごとく阿弥陀如来が浄土の根源より往生人の菩薩をささえながら、本願力回向のはたらき摂化活動をして下さっていると考える。そこには如来の循環性という根柢は考えられない。又、還相の菩薩とは阿弥陀如来ということも同様を考えるべきではないと考える。あくまで、菩薩(浄土の往生人)が阿弥陀如来のささえによつて、還相の菩薩となり摂化活動をされる廻向と考える。

- 『教行信証講義』山邊習学・赤沼智善共著 法藏館 昭和三九年  
『講解教行信証』星野元豊著 法藏館 平成六年十一月一日  
『教行信証総説』金子大栄著 百華苑刊 昭和四四年六月二〇日  
『教行信証の研究』住田知見著 法藏館 昭和六二年七月一〇日  
『教行信証の研究』重見一行著 法藏館 昭和五六年七月二〇日  
『教行信証に聞く』桐溪順忍著 教育新潮社 昭和四五年六月  
『教行信証に学ぶ』村上速水著 永田文昌堂 平成八年三月  
『教行信証の思想』寺川俊昭著 文栄堂書店 平成二年四月  
『教行信証講話』金子大栄著 文栄堂書店 平成四年一二月  
『浄土とは何か』長谷正當著 法藏館 平成二二年一〇月  
他